

今こそガルシア・ロルカを悼むとき  
アントニオ・アロンソと嵯山奈奈が初共演

# 『ベルナルダ・アルバの家』

文 / 濱田吾愛 texto por Wakana Hamada



## 女性たちの(自由への叫び)

詩人・劇作家のフェデリコ・ガルシア・ロルカがスペイン内戦の犠牲となってから、2006年で70年を迎える。それを記念してアントニオ・アロンソ、嵯山奈奈という西日のベテランふたりがこの2月、世に送り出すのが、『ベルナルダ・アルバの家』だ。

夫亡きあと家を独りで守り、娘たちにも厳しい掟を課す母ベルナルダ。閉ざされた家にひとりの男の影が現れたとき、悲劇の幕が上がる——。「血の婚礼」「エルマ」と並ぶ(悲劇三部作)のひとつ『ベルナルダ・アルバの家』を、監督であり振付け師でもあるアントニオ・アロンソと嵯山奈奈はどう表現するのだろうか。それを聞きに、スタジオを訪れた。

嵯山扮するベルナルダと、娘たち、アロンソ扮する男ベガ、スタジオを飛ばしっぱなしに使うて稽古していた。バストンを手に集中する嵯山。深く低い声で鋭い指示を飛ばしつづけるアロンソ。一方日本語も堪能なマエス・ロは、曲を収録したMDの腰子を悪いと「あ、もうダメだ」と日本語で大仰に嘆いておせるなど、場をなませるサ・ビス(?)も忘れない。稽古終了後、熱気之余韻をまじったまま、アロンソは語り出した。

「今、スペインには、女性をめぐる問題がたくさんあります。それを考えるたびに胸が痛む。『ベルナルダ・アルバの家』は、女性たちの(自由への叫び)。だと私は思っています。支配者である母親ベルナルダに服従を強いられ、娘たちの、自由になりたい、という気持ち。そこから、少しずつ物語を育てていった……頭の中映画を観るうちにね(笑)」

「自由への叫びは、強い。」

「自由は、世界の誰かが望むものではなく、家も軍事服もほしい、でも何よりほしいのは自由です。話す自由、愛する自由、自分を表現する自由、自由がなければ、人は何にも表現できないんです。独りで島に行っちゃって、そんなものは自由じゃない。生活の中でこそ、人は自由にならねばならないんです。」

その思いは、演技指導にも表れる。

「恥ずかしがり屋の日本女性には、(一)芝居

はとても難しいでしょうね。でも私は彼女たちに言っています、大切なのは、表現することだから、バイオラ、それより性格の違いやテクニック、女優としての顔を、彼女たちの胸の奥から引き出しなさいです。」

そのために、ベルナルダの役割はすわめて重要。「特に表現してほしいのは、ベルナルダの(内なる力)です」とアロンソは言う。それを聞いて嵯山は、「うーん、困っちゃうなあ」と、照れたように笑った。

## ロルカのとらえた空間、匂い

「私はアントニオのことが好きだし尊敬しているし、彼と意図に沿うように頑張りたい。」それでも作品を創るうえで、何かがおかしいと思えばストレートにそれを伝える。「私」とときの経験と力を使うように言ってもいいのかな、という思いはすくありません。だけど、言います(笑)。

妥協からは、何も生まれない。本音のやりとりを経て、作品は前へと進んでいくのだ。ちやみちやとした口調で話す彼女自身は、『ベルナルダ・アルバの家』に「アンタルシアの匂い」を感じるという。

「アンタルシア独特の、ちよっと個性的な……」

よくあるじゃないですか、それはそれで人間性の真実を突いていて、おもしろいと思うんです。ロルカの詩の中にも、いくつか好きな

のがあるんですよ。風景が、まさにまぶさに浮かぶ、湧き起る感情を直接語るのではなく、風景を語るのによって、ロルカは自分の心情を託してんだと思う。カマラみたいな「カティ」とも同じ風景でもカマラマインによって写真が違ってくる、ロルカのとらえた空間とか雰囲気とか匂いとかが違って、そこに私は非常に「フラメンコ」を感じるんです。」

ふたりのアプローチは、どう溶け合い、結晶するのか。記念の年に、しかと見届けたい。